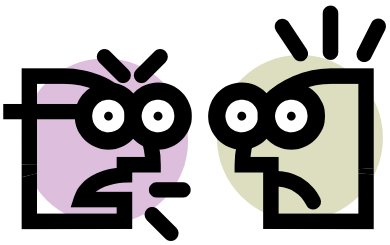
西俊輔の「毎日楽しく」

Vo1.71　2011年7月号

みなさんは、「小善は大悪に似たり　大善は非情に似たり」という言葉を聞いたことがありますか？

たとえば、ご自分の子供をかわいがるあまり、すごく甘やかして育てたとしましょう。子供自身は喜ぶでしょうけど、その結果、わがままなとんでもない人間に育ってしまった場合、その後の人生でその子供は大変な苦労をすることになるかもしれません。目先のことしか考えずに、相手に施そうとする善行を「小善」と言うそうです。そのときはいいように見えても、後々悪い結果を招くことになるため、つまらない善をなすことは、かえって悪をなすことになってしまうという意味で、「小善は大悪に似たり」と言うそうです。

一方、これとは逆に、一見すると大変厳しく非情に見える対応が、相手にとっては良い結果をもたらすものが「大善」です。えてして、「大善」は非情に見えることが多いため、「大善は非情に似たり」と言うそうです。これは子供のしつけに限らず、会社などでの上司と部下との関係についてもあてはまります。小言などはいっさい言わず、常に「いい人」である上司は部下にとって一見良さそうに見えますが、その結果、その部下が社会人としては他で通用しない人間になってしまったり、最悪の場合、会社の業績に悪い影響を与えることがないとも言えません。むしろ、非情に思える厳しい上司の方が部下にとっても会社にとってもいい場合が少なくありません。

ただ、難しいのは、その非情さや厳しさが本当に「大善」なのかどうかという点でしょう。子供のしつけであれば、こうした厳しさと「虐待」とは明らかに違いますし、上司の厳しさも個人的な「怒り」であってはならないはずです。両者の大きな違いはもちろん、そこに相手を思いやる気持ちがあるかどうかです。

困っている相手を助ける場合にも、「大善」を意識したとたん、その助け方が簡単ではなくなるような気がします。
慈善事業や災害を受けた方々への支援のしかたも、それが単なる「小善」なのか、それとも「大善」なのかは、意外に難しいのかもしれませんね。